



Photo all by ; Daisuke Aochi

特集1

犬島対談



劇作家・演出家

舞踊家・振付家・劇作家・演出家

坂手洋二 × 矢内原美邦

公益財団法人 福武教育文化振興財団創立25周年記念事業「犬島 海の劇場」の一環として、9月22日、23日に犬島の南部・西ノ谷の湾岸を会場に新作野外劇「内海のクジラ」を上演しました。初演が終わった後、作・演出の坂手洋二氏と振付・矢内原美邦氏に犬島で対談をしていただきました。

一犬島について

矢内原 2010年に精錬所に訪れたことがあるのですが、今回はカフェができたりしていましたね。道を歩いていたら島民の方にやさしく声をかけていただいて、楽しく過ごしました。

坂手 美邦さんは世界のいろいろな場所で作品づくりをしていると思いますが、これまで「島」で何かをされたことはありますか？

矢内原 初めてです。海はやっぱりすごかったです。

坂手 海がすごいです？

矢内原 海をバックに芝居をするという……海の劇場がすごかったです。

坂手 僕らもいろいろな劇場で公演をしてきたけど、島で公演をすることはなかなか考えられなかった。やりたいと思ってできることではないよね。犬島がアートの開放されてきた場所だから、できたと思う。

矢内原 海があるだけでいろんなことが不便になるけれど、それで育つ文化があるのだと考えさせられました。

坂手 牛窓から犬島に寄って旭川の京橋に行く船便があったというのを聞いて、「町」の中心にある川の文化と犬島が繋がっていたのかと思うと、面白いなと。

矢内原 その当時の場面がセリフとなって芝居に入っていましたね。

一野外劇について

矢内原 犬島に入ってから稽古で役者の集中力がすごく高まりましたね。

坂手 海が劇場になりえるのかと不安な面もあったけど、実際に海を目の前にしたときに役者の身体じたいが変容していったのは素晴らしかった。演劇はフィクションであると思われているけど、僕はフィクションよりもっと

「現実」だと思っている。新しい現実をみせるのが舞台芸術だと考えると、太陽光のもと、海で「非現実」が導く新しい「現実」をみせる、観客と俳優が新たな関係を見出すという今回の演劇は、これまでにない舞台芸術の入り口がみえたような気がする。

矢内原 照明がない昼間の公演は、観客と役者と演出家の勝負になるので、興味はありますが怖いですね。

坂手 劇場では照明効果は大事です。照明によってどうフォーカスするかっていうディレクションが働いて、観客は光があたらないところは観なくていい。野外はそうした作り手と観客のバランスがとりにくいのですが、「内海のクジラ」は無意識に聞こえてくる波の音によって、助かりましたね。波の音は「自然」なのに「非現実」を喚起するんです。

矢内原 自然の力にたくさん助けられました。クジラが浜辺に打ち上げられているシーンになるとトンビが低空飛行してきたのには驚きました！

一犬島の可能性は？

矢内原 島民の方が演劇を観た帰り道、作品について感想を話し合っている姿に感動しましたね。犬島には現代アートが既にあるので、これからはモノを残していくのではなくて気持ち(心)を残していくことが大切だと思っただけで、演劇にはそれができると思った。

坂手 イタリアのスポレートに近い山の中には、ニューヨークを拠点とするラ・ママ劇場が設けた研修施設と野外劇場があって、演劇フェスティバルの時期には世界各地から人が訪れている。犬島の場合は、既に研修施設と演劇が結びついているし、瀬戸内国際芸術祭で維新派が公演したことによって、各地から演劇を観に来るといった習慣ができつつあるので、継続することによって日本には珍しい「地域に定着した芸術のお祭り」という前例を作れる場所となると思う。

矢内原 犬島で演劇フェスティバルができるといいですね。会場を転々と、歩いて回る…。

坂手 そう、歩いて回れるのは魅力！犬島は、このコンパクトさの中で何か一つのまとまったものを体感したという手応えを得られる。犬島の可能性としては、そこは大きい。他の場所ではなかなか得られない。

一地域にこだわる

矢内原 坂手さんは、岡山出身ですよね。地元で演劇をやりたいという気持ちは強かったですか？

坂手 芝居をすることと故郷を結びつけて考えたことはずっとなかった。最近は岡山で何ができるのかを考えているが、それは東京から地元に戻るということではないと思う。

矢内原 そうですね。地元に戻るならともに演劇をつくってきた仲間と一緒に戻れるようなシステムがあれば、地元でできる可能性もあるかもしれません。それには、ヨーロッパなどで行われている国や県のバックアップは絶対に必要になってくるように思います。

坂手 今の日本は「劇場法」によって公共の劇場が中心に置かれる方向になっているけど、アーティスト側からすると民間のプライベートシアターのほうが馴染むと思う。市民の誰かが始めたものでもそこに公共性を見出せば惜しまず官民がサポートする、という形の方がいい。ベルリン最大の国立劇場フォルクスビューネを牽引していたリエンタールが独立してHAUという民間劇場を造り成功したのは、その実例。牛窓で佐竹徳さんを慕った絵描きたちが「赤屋根」に集ったのもそうだけれど、アーティストの自発性・自立性は保証されるべきだし、国家によってあてがわれ配置されるのではなく、自ら望んで自分の居場所を手に入れる人がいれば、そこに自然と人が集まってくるんです。

矢内原 自ら進んで自分の居場所を手に入れようとするのはとても重要ですよ、常にその気持ちを持っていられたら、そうすることができれば、いいなと思います。



坂手洋二 ——— Yoji Sakate

劇作家・演出家。燐光群主宰。岡山県生まれ。岡山芳泉高等学校、慶應義塾大学国文科卒。ほぼ全作品の作・演出を手がけ、燐光群の作品を中心に、岸田國土戯曲賞、鶴屋南北戯曲賞、読売文学賞、紀伊國屋演劇賞、朝日舞台芸術賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞を受賞。2005年岡山県文化特別顕賞。戯曲は海外で10以上の言語に翻訳され、出版・上演されている。日本劇作家協会会長。日本演出者協会理事。国際演劇協会日本支部理事。『坂手洋二 II』(沖縄三部作 ハヤカワ演劇文庫)等、多くの戯曲集と評論集が出版されている。<まなびピア岡山2007>開閉会式の総合プロデューサーを担当。昨年は民藝に大滝秀治の遺作となった『帰還』を、青年劇場に『普天間』を書き下ろしている。



矢内原美邦 ——— Mikuni Yanai

舞踊家・振付家・劇作家・演出家。ニプロール主宰。大学で舞踊学を専攻、在学中にNHK賞、特別賞など数々の賞を受賞。日常の身ぶりをモチーフに現代の空虚さや危うさをドライに提示するその独特の振付けは国内外での評価も高く、身体と真正面から向き合っている数少ない振付家のひとりと言える。ミクニ ヤナイハラプロジェクトでは演劇にも挑戦し、ジャンルを問わないその活動はニプロールのみならず、多数のアーティストとコラボレーションするなど世界中を舞台に活躍中。坂手洋二とは、燐光群『現代能楽集 ハイブセン』『現代能楽集 チューホフ』『アイ・アム・マイ・オウン・ワイフ』、東京演劇アンサンブル『荷』で共同作業を行っている。2001年ランコントレ・コレオグラフィック・アンテルナショナル・ドゥ・セーヌ・サン・ドニ ナショナル協議員賞受賞、2007年第1回日本ダンスフォーラム賞優秀賞受賞、2012年第56回岸田國土戯曲賞受賞。